群青のうた

中神英子

群青のうた

中神英子

思潮社

群青（ぐんじょう）のうた

著者
中神英子（なかがみえいこ）
発行者
小田久郎
発行所
株式会社思潮社
〒一六二―〇八四二　東京都新宿区市谷砂土原町三―十五
電話〇三（三二六七）八一五三（営業）・八一四一（編集）
ＦＡＸ〇三（三二六七）八一四二
印刷所
三報社印刷株式会社
製本所
小高製本工業株式会社
発行日
二〇一四年五月一日

目次

砂丘 8
時計の夢 10
顚末 15
夜想曲 18
ダズ 24
みなこ 32
常夜 38
雪祭り 42

*
舟　54
稲妻　58
あかつきの木　62
糸車　64
ハンカチ　68
春　80
燃える村　84
詠唱　黒いお菓子アデーレ　93

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

群青のうた

中神英子

思潮社

群青のうた

中神英子

目次

砂丘　8
時計の夢　10
顚末　15
夜想曲　18
ダズ　24
みなこ　32
常夜　38
雪祭り　42

＊
舟　54
稲妻　58
あかつきの木　62
糸車　64
ハンカチ　68
春　80
燃える村　84
詠唱　黒いお菓子アデーレ　93

写真＝著者　装幀＝思潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

群青のうた

砂丘

よる　鳥が来て
わたしのかたちで啼くので
わたしは砂を握り眠る
鳥がわたしの両手に翼をそえて
その啼き声通り
わたしがあした　はろばろと歩む
砂丘を作ってくれるように
やわらかに美しく流れる風紋と
乾いた清涼な空気の中に
新しい夜明けをもって

立てるように……と
まだくらいうちに
わたしの方向へ鳥が来て
わたしのかたちで啼くことを
わたしは知っているので
よる
わたしはわたしの分の砂を握り眠る

時計の夢

眠れない夜のこと
気づくと見知らぬ石の二階家にいて
私はその窓辺に明かりをつける
眠れない……ときは
必ず　その窓の下を
赤い服を着た郵便配達夫が
金色に光る輪の自転車で
通っていくのがわかるので

そして
庭の片隅のベンチに

ひとりの青年が現れる
この世でまみえることのない
私のおとうと

彼は今もどこかにいる
郵便配達夫が来る夜
おとうとの影法師も　また
庭に姿を現わす

なだらかな丘陵がどれも
薄い弧を描きながら地平まで続いている
待っていると
遠くにポツリ金の輪の光が見え
私の目に輝きが点る

彼は丘の面に沿って

時々見えたり隠れたりしながら
ゆっくりその真紅の服を鮮やかにして
近づいてくる
窓の下を同じ赤い帽子を目深にかぶり
雑草と小石のある道を照らしながら
静かに横切っていく
しゃらしゃらしゃら
回る輪の音だけかすかに響く

私に手紙が来るわけではない
私のそばに止まることはない
でも　それでいいのだった

やがて
赤い服の背を丸め　また
丘陵を見えたり隠れたりして遠ざかっていく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com